

Check! セルフチェックシート



— も く じ —

1 「セルフチェックシート」の活用について	
「セルフチェックシート」の目的と活用	1
令和版 授業改善のための「セルフチェックシート」	2
2 評価項目の解説	
評価項目1 「児童生徒の資質・能力を育成するための手立てを準備しましたか？」	3
評価項目2 「導入で児童生徒が自ら問いを見出せるよう工夫しましたか？」	4
評価項目3 「児童生徒一人一人が自分の考えをもつ（形成する）時間を設けましたか？」	5
評価項目4 「児童生徒相互が関わり合い、考えを深める場を設けましたか？」	6
評価項目5 「本時のねらいに迫る児童生徒の姿が見られましたか？」	7
3 補助資料	
①「板書」	8
②「発問」	9
③「ノート指導」	10

1 「セルフチェックシート」の活用について

「セルフチェックシート」の目的について

授業改善をすすめるためには、授業づくりから指導・支援の方法や評価まで、学習成果とともに、教師自らの課題を意識することが大切です。課題意識が授業者一人一人の授業改善ポイントに気付かせてくれるとともに、教材研究や優れた授業実践から学ぼうとする意欲にもつながると考えます。新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」として、次のような学びが明示されました。

主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び。

対話的な学び

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めていく学び。

深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。

このように、セルフチェックシートは、授業者が育成したい資質・能力につながる学びとなるよう、授業改善をすすめるために作成したものです。

「セルフチェックシート」の活用について

- 1 単位時間の授業での活用を想定して作成してありますが、授業によっては、一部の項目のみの評価になることも考えられます。
- 各評価項目で求めているものを具体的にするために、解説資料に各観点例の説明を記載しました。また、授業全体にかかわるものとして板書、発問、ノート指導の資料も記載しました。
- 教科・領域等によっては使いにくい項目があります。また、発達の段階等を考えると、表現や内容に考慮を要するものもあります。読替え等をして活用してください。
- 評価項目に付記した観点は「例」として挙げてあります。教科等の特質や学校の実態などこれ以外にも考えられます。必要に応じて観点例を加除するなど各学校において工夫を加え、さらに使いやすいものにしてください。
- 授業者自身が、自己評価するだけでなく、ワンポイント授業参観をする際の批評箋としての活用も考えられます。
- 一度だけでなく、継続的、計画的な活用が望まれます。
- 「主体的・対話的で深い学び」は1 単位時間の中で全て実現されるものではありません。単元や題材のまとまりの中で、主体的に学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために児童生徒が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で授業づくりを行っていくことが大切です。
- セルフチェックシートは本シートのほかに道徳版、特別支援教育版、体育・保健体育科版、図工・美術科版、音楽科版の授業改善シートもあります。併せて活用ください。



このシートは、授業改善のための一つの手立てとなります。大切なことは、自分が行っている授業を振り返り、課題意識を持つことです。それが「主体的・対話的で深い学び」実現のための第一歩です。

令和版 授業改善のための「セルフチェックシート」

月 日 ()	年 組	指導者	
教科	単 元 名		

4 : 十分できた 3 : 概ねできた 2 : あまりできなかった 1 : できなかった		
過程	評 価 項 目	自己評価
授 業 前	児童生徒の資質・能力を育成するための手立てを準備しましたか？ 〈観点例〉 <input type="checkbox"/> 単元や本時で目指す、児童生徒の具体的な姿を想定した。 <input type="checkbox"/> 本時に適した学習形態の工夫をした。 <input type="checkbox"/> 本時に必要な教具・教材・資料を適切に準備した。	4・3・2・1
	導入で児童生徒が自ら問いを見出せるよう工夫しましたか？ 〈観点例〉 <input type="checkbox"/> 本時の学習の手助けとなる既習事項を確認した。 <input type="checkbox"/> 興味・関心や疑問をもてるような資料を提示した。 <input type="checkbox"/> 児童生徒が自ら問いを見出せる（課題を発見する）ように、教材や発問等を工夫した。	
自 分 で 取 り 組 む	児童生徒一人一人が自分の考えをもつ（形成する）時間を設けましたか？ 〈観点例〉 <input type="checkbox"/> 課題（学習問題）を解決する見通しを立てさせた。 <input type="checkbox"/> 必要な情報の収集方法や取り組むときの視点、思考の進め方の指導など、考えをもたせる環境を整えた。 <input type="checkbox"/> 学び合いに向けて、文章や言葉・図表など適切な方法で、自分の考えや説明を記述させた。	4・3・2・1
	児童生徒相互が関わり合い、考えを深める場を設けましたか？ 〈観点例〉 <input type="checkbox"/> 自分の考えをわかりやすく説明する指導をした。 <input type="checkbox"/> 学び合いが充実するような、対話的な活動を取り入れた。 <input type="checkbox"/> 様々な意見を比べながら聞かせるなど、考えを深める指導をした。	
ま と め あ げ る	本時のねらいに迫る児童生徒の姿が見られましたか？ 〈観点例〉 <input type="checkbox"/> 児童生徒が自ら学習を振り返る場面を設定した。 <input type="checkbox"/> 自己評価や相互評価などの評価活動を行った。 <input type="checkbox"/> 新たな課題を発見するなど、次時の学習への関心や意欲をもたせた。	4・3・2・1

(メモ)

2 評価項目の解説

「授業前」評価項目 1

児童生徒の資質・能力を育成するための手立てを準備しましたか？

<観点例>

- ① 単元や本時で目指す、児童生徒の具体的な姿を想定した。
- ② 本時に適した学習形態の工夫をした。
- ③ 本時に必要な教具・教材・資料を適切に準備した。

授業においては、ねらいを達成することが最終的な目標です。しかし、そこに至るまでの道筋は決して一つではありません。教師がルートを決め、脱線しないように援助すれば、短時間で多くの学びがあるように見えます。しかし、そのような受け身の学習では、興味・関心が刺激されず、主体的に学習に取り組む態度の育成にもつながりません。そこで、課題(学習問題)の解決方法や資料の活用の仕方などを、児童生徒自身に学ばせることが大切となります。

■観点① 育成すべき資質・能力を考える

大切なことは「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く『知識・技能』の習得)」「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成)」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養)」の三つの柱、つまり、三観点を意識することです。

三観点を踏まえながら、さらに「目指す児童生徒の姿」を、具体的に想定します。各教科の特性に配慮しながら指導案やセルフチェックシートのメモ欄などに書き留めておきましょう。

(例)

- 積極的に情報を集め、学習課題に沿って自分の考えをもち、話し合おうとする子。
- 資料を活用し、共通点や相違点から、自分の考えをまとめていく子。

付けたい力を身に付けた児童生徒の姿がイメージできていれば、手立てや評価を考えることにもつながるでしょう。

■観点② 学習形態を考える

授業には流れが必要です。一斉指導ばかりでなく、様々な学習形態と活動を工夫しましょう。ただし、いずれの場合も児童生徒の発達の段階に応じた学習活動かどうかを、十分吟味することが大切です。そのためにも、年間指導計画にしっかりと位置付けましょう。

学習形態としては、「個別」「ペア」「グループ」「課題別」「全体」などがありますが学習の目標を考え、目的に応じた効果的な学習形態を工夫することが大切です。

■観点③ 資料の活用の視点

課題(問題)解決のために、資料を活用して調べ学習をすることがよくあります。その際の資料活用の視点としては、

- 図や表などのタイトル
- 縦軸や横軸の単位や数字
- 絵や写真から読み取れる日時や場所
- 地図に示された場所、地図記号から読み取れる地域の特色
- 変化しているところ
- 全体的な特徴
- 共通点
- 原因や結果
- 不思議に思うこと
- 読み取ったことについての自分なりの解釈

などが挙げられます。

こうした資料の読み取りや解釈の指導があつてこそ児童生徒に資料を収集する力や活用する力を向上させることができるのです。



「見出す」評価項目2

導入で児童生徒が自ら問いを見出せるよう工夫しましたか？

<観点例>

- ① 本時の学習の手助けとなる既習事項を確認した。
- ② 興味・関心や疑問をもてるような資料を提示した。
- ③ 児童生徒が自ら問いを見出せる（課題を発見する）ように、教材や発問等を工夫した。

1時間の授業の導入においては、児童生徒が、学ぶことに興味・関心をもち学習意欲を高めたり、自ら課題を見出して解決策を考え学習の見通しをもったりすることが「主体的な学び」につながります。そのためには、児童生徒の既習事項を的確に把握しておくことや、資料提示の工夫、教材や発問の工夫により児童生徒に課題（問題）意識をもたせることが大切です。

■観点① 既習事項の確認

前時または前学年までに

「習得した知識・技能・見方や考え方」

「経験した学習活動」等について

児童生徒一人一人の実態把握を的確にしておきましょう。そのためには、前時までの授業での※振り返り活動が重要であることはいまでもありません。既習事項の確認の方法としては、教師による観察、ワークシートやノートの記述、プレテストやアンケートによる調査などがあります。※平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査

の結果に基づく改善について（リーフレット）参照

■観点② 資料提示の工夫

ア 資料の内容

「なぜだろう、おかしいな」（疑問・矛盾）
「不思議だな、驚いたな」（感動・驚き）
「困ったぞ、解決したいな」（困難・必然）
「もっとできるようになりたいな」（期待・希望）
「調べたいな、やってみいたいな」（意欲・意識）
などと児童生徒が、心を揺さぶられたり、知的
好奇心を刺激されたり、立ち止まって考えたり
しながら、自ら課題（問題）意識をもてるよう
な資料を用意しましょう。

イ 資料提示の方法

〔視聴覚的な資料提示〕

教科書、資料集、書物、新聞、グラフ、絵
写真、ビデオ、CD、ICT機器 等

〔体験的な資料提示〕

実演、実験、模範演技、模範演奏、実物
具体物、体験活動 役割演技 等

内容や目的に応じて、これらを選んだり組み合わせたりして資料提示の仕方を工夫しましょう。

■観点③ 教材や発問の工夫

児童生徒が自ら問いを見いだす（課題を発見する）ためには、指導者の深い教材研究と練られた発問準備は欠かせません。

ア 教材選択のポイント

- 学習のねらいが達成可能である。
- 計画的・意図的である。
- 児童生徒の実態に即している。
- 児童生徒の学習意欲を喚起できる。
- 既有的知識・技能・見方や考え方を活用できる。

イ 発問の工夫

児童生徒に知識等を確認する一問一答式の「質問」に対し、「発問」は児童生徒の思考を促す問いです。

「質問」と「発問」を使い分け、授業の「どの場面で」「どんな発問」をするのかを吟味しましょう。

質問の例・・・答えが固定されやすい

「このお話の登場人物はだれですか」

「わかっていることは何ですか」

発問の例・・・答えが複数で多様性がある

「この写真から気づいたことは何ですか」

「資料を読んでどんなことを考えましたか」

「なぜ、このような結果になったのでしょうか」

「この後、どうなると思いますか」

児童生徒の反応によって、「どうしてそう考えたの？」と切り返したり、「みんなはどう思う？」「本当にそうなのかな？」と、全体に問い返したりして学級みんなで課題（問題）意識を共有しながら、課題（学習問題）を設定しましょう。

自分で取り組む」評価項目 3

児童生徒一人一人が自分の考えをもつ（形成する）時間を設けましたか？

<観点例>

- ① 課題（学習問題）を解決する見通しを立てさせた。
- ② 必要な情報の収集方法や取り組むときの視点、思考の進め方の指導など、考えをもたせる環境を整えた。
- ③ 学び合いに向けて、文章や言葉・図表など適切な方法で、自分の考えや説明を記述させた。

基礎的・基本的な知識及び技能を活用する力を育てるためには、指導計画の段階で、児童生徒自身が様々な情報をもとに考えをもつ（形成する）場面の設定と十分な時間の確保を行う必要があります。また、ノート等を活用したり、言語活動を意図的に取り入れたりすることが大切です。

■観点① 課題解決の見通しを立てさせる

課題解決の見通しを立てさせるために大切なことは、まず単元や本時の学習を通して、自分の目指したい目標を明確にイメージさせることです。

例えば「解決できた」ときの結果を具体的に予想させます。あるいは、課題を解決したときの自分の様子を想像させます。教科の特性に合わせ、目標を明確にさせる方法を選択しましょう。

目標を明確にさせるとともに「今まで学んできたことを使い解決できないか。」を考えさせます。

学んできたことを振り返らせて「本時の課題と同じことは何か。違いは何か。」を明らかにさせることが重要です。本時で収集すべき情報など、自分の考えを形成する道筋が分かるようになってきます。

■観点② 考えをもたせる環境づくり

単元の指導計画及び本時の授業展開計画に、児童生徒が自分の考えをもつ（形成する）ことができるような環境を、整えておきましょう。

学級の実態に合わせ、解決したい課題に関わる必要な情報を収集させたり、自分の考えがもてない児童生徒に取り組むときの視点や思考の進め方を指導したりして「何をどのように考えたらよいか」がわかるようにします。

また、自分の考えをノート等にかかせるなど、



考えを整理させる手立てが必要になります。さらに、「今は自分で考える時間、整理する時間だ」ということを、児童生徒に意識付ける指導が大切です。そのために学習過程のパターンをつくって、年間を通して、継続的に授業を実施しましょう。

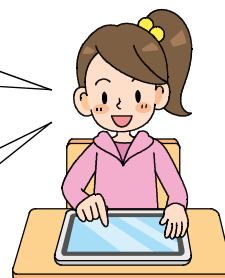
児童生徒自身が学習活動を進める中で、「あ、今は、考え、整理するときだな」と分かるようになります。

■観点③ 「伝える」を意識した整理方法

自分の考えを生み出したり整理したりするためのコミュニケーションツールには、様々なものがあります。各教科の特性に合わせて、文章や言葉（メモ）、図表や絵など、「わかりやすい伝え方」につながる表現の仕方を示して、児童生徒が自ら活用できるように、支援していきましょう。

図工：
どんな色や形にしようかな

技術：
本立ての寸法や形は
どうしようかな



児童生徒の思考の流れに合わせた授業のテンポが大切です。せっかくよい発問をしても、テンポが速すぎて子どもが考えを整理する時間を与えないと、発言力のある一部の児童生徒だけが答えてしまう授業や、指名しても「分かりません」「考え中です」が続く授業に陥ってしまうことになりかねません。

「広げ深める」評価項目4

児童生徒相互が関わり合い、考えを深める場を設けましたか？

<観点例>

- ① 自分の考えを分かりやすく説明する指導をした。
- ② 学び合いが充実するような、対話的な活動を取り入れた。
- ③ 様々な意見を比べながら聞かせるなど、考えを深める指導をした。

自分の考えを整理した後は、それを自分の中に留めておくのではなく、その考えをいろいろな角度から吟味し、深化・発展させることが大切です。そのためには、他者と意見を交換する場を効果的に設けて、児童生徒が相互に関わり合いながら、自分の考えを広げ深めていくことが必要です。

■観点① 自分の考えを分かりやすく述べる

ア ノートを活用する

○自分が伝えたいことの中心を含む文を簡条

書きにすることにより、

- ・必要なことを漏らさない
- ・伝えたいことを強調する

などの力を身に付けさせます。

○「私は～に賛成・反対である。」

「理由は～だからである。」

のように自分の考えを整理して

伝える力を身に付けさせることが、

言語活動の充実にもつづきます。



■観点② 対話的な活動を取り入れる

ア 児童生徒の発言を問い直す、繰り返す

児童生徒のなかには「わかったつもり」の子どももいます。そうした児童生徒に「今のは、どういうこと？」「あなたの言葉で、もう一度説明して」と問い直してみましよう。また、わかっていない児童生徒に気付いたら「わかりにくいところがあったみたい。説明できる人」と、繰り返し問うことで、わかり、説明できる児童生徒が少しずつ増えていくでしょう。

イ 対話的な活動は効果的に行う

一人の児童生徒の考えから、直ちに本時の結論としないようにしましょう。イラストの教師のような問いかけを続けることで、児童生徒は、「さらによい考え」を導き出そうとする姿に変わってくるでしょう。



「〇〇さんは賛成のようだけど、付け足すことはありませんか？」

「〇〇くんは反対意見を書いていただけ、あなたの考えも聞かせてください。」

■観点③ 様々な意見から、考えを深める

ア 児童生徒同士の意見交換を大切にする

図のア、イに終始せず、ウを活発にすることにより、児童生徒は磨き合い、考えを深化、発展させます。

イ 指名を工夫する

事前に、誰がどのような考えを持っているかを把握し、指名を工夫することに

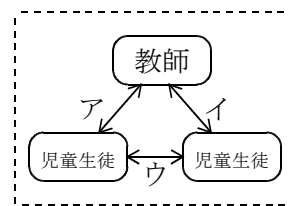
より、児童生徒の視点を変えたり、思考を促したりすることができます。

また、発言する児童生徒の偏りをなくすこともできます。

ウ 聞く側への配慮をする

「発言が受け入れられる」、「発言を上手に聞く」ための指導を随時行いましょう。

- ・発言者を見ながら聞く。
- ・発言が終わってから自分の意見を言う。
- ・聞く観点を示す。



「まとめあげる」評価項目5

本時のねらいに迫る児童生徒の姿が見られましたか？

<観点例>

- ① 児童生徒が自ら学習を振り返る場面を設定した。
- ② 自己評価や相互評価などの評価活動を行った。
- ③ 新たな課題を発見するなど、次時の学習への関心や意欲をもたせた。

学習を振り返らせる場面で、今日「何を学習し、何が分かったのか」を振り返ることにより、学習内容が着実に理解されていきます。このような振り返りが、学習意欲をもたせるとともに、育成したい資質能力を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」のある授業改善にもつながります。

■観点① 学習を振り返る場面

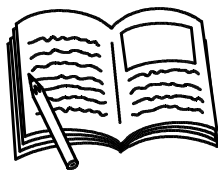
まとめの段階では、学習を振り返る場面を設定し、「学習問題の解決が図られたか」「学習したことが身に付いたか」「学習に意欲的・主体的に取り組んだか」などを把握するために、次の4点を大切にしましょう。

- 学習のまとめの時間を必ず設ける。
- 教師や友だちの言葉でなく、自分の言葉で何がわかったかを書かせる。
- また、わからなかったこと、疑問に思ったこと等も書かせる。
- 書けない児童生徒には、個別指導をする。

千葉県教育委員会では「自分の言葉で学習のまとめを書く」ことを推奨しています。

「自分の言葉でまとめる」ことで身に付いた資質・能力を自覚するようになることや自分の考えを妥当なものとしたり、広めたりしようとするなどの効果が期待されます。

自分の言葉でまとめる活動を積み重ねることで記述力の向上にもつながるでしょう。



■観点② 評価活動の実施

自己評価、相互評価などの評価活動では、何のために評価をするのか、どんな目的で行うのかを、いつも意識することが大切になります。

- 自己評価では、学習内容に関わる振り返りを大切にする。

例えば「～できてよかった」「わかってうれしかった」という情意面よりも、「どうしてできるようになったか」「なぜわかるようになったか」など。

- 相互評価では、お互いの良さを認め合うことを大切にする。

例えば「〇〇さん、こんなによく考えていて、すごいなあ」など。

また、評価がいつも表面的になったり、同じようになりたりする時は、評価し合う相手等を考慮していきましょう。



■観点③ 学習意欲の喚起

- 学習への取組状況を認める。
- 努力したことをほめる。
- さらに工夫できるように励ます。
- 学習で疑問に思ったこと、もっと調べたいと思ったことを大切にする。

学習意欲を高めるには、「認め、ほめ、励ます」ことが基本になります。そして、児童生徒の意識を大切にする上で、疑問等を生かして、次時につなげていきたいものです。

3 補助資料

① 板書

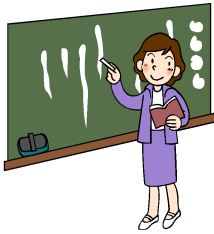
板書を見れば授業がわかる

よい授業はよい板書を残す

よい板書の条件

(例)

- 1 学習のねらいが明確に示されている。
- 2 授業の流れがわかる。
- 3 児童生徒の発言が書かれている。
- 4 ていねいな文字で書かれている。



- 板書は、教師の思いを表現する手段です。
- 板書は、学習過程や思考の流れを示しています。黒板を見れば、児童生徒の発言やその展開など、1時間の授業を振り返ることができます。そのために、板書計画が大切となります。
- よい板書は、よいノートづくりにつながります。

■ 板書の持っている要素

- 集中…学習の目をそこに集中
- 情報収集…思考情報の獲得
- 整理…思考の過程の整理
- 焦点化…思考の中心を焦点化
- 補完…説明・指示等、思考の隙間を補う
- 強調…大事なポイントを示す

- 各種色チョーク
 - ・基本は白、必要に応じて黄色。赤や青は見づらい。ただし、色分けして効果的に表示する工夫もしたい
- 定規 (1 m物差し、三角定規、分度器等)
 - ・正確さ、わかりやすさ、美しさ
- グループや班、個人のネームプレート
 - ・考えや予想、整理
- その他マグネット、小黒板、指示棒

■ 準備しておくといもの

「前の授業の板書が残っていないか」「黒板の溝が汚れてないか」など、きれいな黒板で学習できるように、適切な指導をしましょう。また、ユニバーサルデザインの視点からも授業と関連のない掲示物は貼らないよう心がけましょう。

■ 板書の構想

板書は、児童生徒の実態を把握して、意図的に表示されるものでなければ、その教育効果は半減してしまいます。計画性のある板書が生きた板書なのです。次は、パターン化された板書の構想例です。

- 学習問題
 - ・簡潔に、わかりやすく、はっきりと
 - ・色チョークで線、または四角囲み
 - ・何度も振り返る
- 見通し(予想、仮説、方法)
 - ・多様な考え
 - ・簡条書きで整理
- 実験・観察、検証(確かめる)
 - ・結果をわかりやすく(図・表・グラフ)
 - ・比較しやすいように整理
- まとめ
 - ・わかったことを確認
 - ・結論は色チョークで区別
 - ・次時への問題提示
 - ・消しながら覚えさせる

■ 留意点

板書をしている教師を児童生徒は見えています。『書く位置、書くスピード、ていねいな文字、正しい筆順』を心がけましょう。

② 発問



発問は、授業を支える柱である

『発問は、学習内容を理解させ、ねらいに迫る重要な媒体である。発問の良し悪しが、よい授業になるかどうかの分岐点となる。』

- よい発問は、児童生徒の学習意欲を高め、思考を深化、発展させ、問題解決にむすび付きます。
- よい発問は、児童生徒同士の間関係の育成や豊かな心の醸成につながります。
- 発問をする時は、「何を、どこで、どのように」するのかをよく吟味し、計画的に、かつ、児童生徒の学習状況等に弾力的に対応して行うことが大切です。

■ 発問づくり

発問には、児童生徒の思考を深める役割とともに「指示」「説明」「助言」「評価」などの機能があります。まず、その機能をおさえましょう。

- 指示は、児童生徒の活動を促します。
- 説明は、児童生徒の理解を助けます。
- 助言は、児童生徒のつまづきを解消します。
- 評価は、児童生徒の意欲を高めます。

そこで、これらの機能を生かすために、この4つをバランスよく、最も効果的なタイミングで発問することが大切です。1時間の授業のどこでどの機能を使うのか、教材研究を十分して発問計画を立てましょう。

■ 言葉の吟味

教師の発問の仕方によって授業が停滞し、児童生徒は戸惑ったり、迷走したりしてしまう場合があります。児童生徒の発言を引き出しやすくする言葉の吟味が大切です。

○ある絵を見せて、児童生徒に発言を求める場合の発問と児童生徒の反応例

- ・「この絵を見て知っていることを言いなさい」
→ほとんど答えられない
- ・「この絵を見て分かったことを言いなさい」
→2割答えられる
- ・「この絵を見て気づいたことを言いなさい」
→9割答えられる
- ・「この絵を見て思ったことを言いなさい」
→全員答えられる



たとえば・・・

- | | |
|------|---|
| 指示 | 「この写真を見なさい。」
「何をしているのだろうかね。」 |
| 助言 | 「〇〇をよく見てみよう。」
「どんな表情をしているかな。」
「ヘルメットの色は水色だよ。」 |
| 切り返し | 「なぜそうしているのだろう。」 |
| 評価 | 「いいところに気がついたね。」 |
| 説明 | 「実はこれは・・・なのです。」 |
| 指示 | 「では、□□について調べてみよう。」 |

■ 発問の留意点

- 発問の多い授業は、話し合いが活発ですが、進みが遅く、学習内容が定着しません。
- 説明の多い授業は、指導内容が豊富ですが、児童生徒の興味・関心はわきません。
- 指示の多い授業は、活動が充実しますが、児童生徒の主体性が育ちません。
そこで、児童生徒の反応を促し、思考を深めるために、教材の特性と児童生徒の実態をつかんだ発問を選ぶことが大切です。

③ ノート指導



- よいノートは、「児童生徒の理解を確かにする」「児童生徒の思考を深め広げる」「児童生徒の書く能力を伸ばす」などの役割を果たします。
- ノートは、そのための手段であり、目的ではありません。

■ ノートの実態把握

授業はノートで始まり、ノートで終わります。毎時間、授業では児童生徒はノートを使い、漢字や計算を練習したり、実験や観察の記録をしたり、調べたことをまとめたり、自分の考えを整理したりしています。

児童生徒のノートはどうなっているのでしょうか。1時間の授業の流れとともに、調べたことや考えたことが、分かりやすく、見やすく、自分の言葉で書かれているのでしょうか。今一度、児童生徒のノートに目を向けてみてください。

■ 基本的なノートの指導

各学校や教科では、例えば次のようにノートの使い方について、様々な約束や項目を決めていることと思います。

- ・授業の始めは新しいページにする。
- ・下敷きを敷いて書く。
- ・日付を書く。
- ・単元名や教科書のページ番号を書く。
- ・学習問題やまとめは色枠で囲む。
- ・定規を使って線を引く。

学年始めでの指導はもちろん、日々の授業で継続して指導を行うことが大切です。ノート指導で重要なことは、そのための時間を必ず確保することです。さらに、鉛筆の持ち方や書く姿勢等も、学年を問わず必要に応じて指導することが大切です。

■ 「深い学び」を意識したノート指導

学びを深めるには、「思考し表現する力」が大切になりますが、ノートはそれを育てるための重要な場と言えます。

展開の段階における内容としては、次の3つのことが大切になります。

- ① 予想したことを書く。
- ② 追究している内容を書く。
 - ・観察や実験の経過やその結果を書く
 - ・資料などから規則性や法則性など、発見したことを書く
 - ・読み取ったことなどを書く
 - ・話し合ったり考えたりしたことを書く
 - ・参考となる友達の考えを書く
 - ・絵や図、表を書く
- ③ 新しく発生した問題を書く。

また、授業のポイントなどが分かるようにマークや記号、下線、色付け等の工夫をさせるとよいでしょう。

■ ワークシートは上手に使用

手作りのワークシートは、児童生徒の学習意欲を高め、学習の効率化を図ることができます。反面、児童生徒の思考を大切にしたい展開には合わないところがあります。使用する場合は、学習のねらいや内容などを考慮するとともに、保管等の配慮も必要になります。安易な使用は避けたいものです。

学習の記録はノートが基本になります。ノートの活用を原則とし、必要に応じてワークシートを使用していきましょう。

< 参考文献 >

- 平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果に基づく改善について（千葉県教育委員会）
- 「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム
（千葉県教育委員会）
- 学習指導要領（平成29年3月告示）
- 「平成29年度初任者研修テキスト さわやか先生」（小学校・中学校・特別支援学校編）（千葉県教育委員会）
- 「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）」の実現に向けた授業評価シート（千葉県教育委員会）
- 「研究紀要第48号「わかる授業」を実践するためのセルフチェックリスト」（君津地方教育研究所）
- 「ノート指導の技術」（教育技術文庫）
- 「新ノート指導の技術」（明治図書）
- 「だれでもできるノートスキルの指導 低学年」（明治図書）
- 「だれでもできるノートスキルの指導 中学年」（明治図書）
- 「だれでもできるノートスキルの指導 高学年」（明治図書）
- 「意欲を育てるノート指導のアイデア1、2」（明治図書）
- 「発問上達法－授業づくり上達法PART2－」（民衆社）
- 「授業づくり上達法」（民衆社）
- 「プロの技術に学ぶ 発問構成・発問の仕方」（明治図書）
- 「プロの技術に学ぶ 板書構成・板書の仕方」（明治図書）
- 「秋田県総合教育センター」（HP）

～令和版 授業改善のためのセルフチェックシート～

発行日 令和2年4月1日
編集 千葉県教育庁南房総教育事務所指導室
発行 千葉県教育庁南房総教育事務所
〒292-0833
木更津市貝渕3-13-34
TEL 0438-25-1313
